

土肥秀行

詩と詩でないもの ― イタリアでのハイクについて

本発表は「ベルファゴール」誌 2009 年 1 月号に載ったレーモ・チェゼラーニの小論 *Poëtae honoris causa* を参考にしつつはじまる。この小論は同誌の表紙においては「詩と詩でないもの *Poesia e non poesia*」と表示されており、実際のところ、現在の「詩人」の扱いに対する皮肉となっている。ここでチェゼラーニが意図するのは、秘密結社 P2 事件の首謀者として有名になったリーチョ・ジェツリが、こんにちもなお「詩人」として社会の表舞台に出て以前と変わらない影響力を振るおうとしている状況の告発である。

そこで発表者が連想したのは、そもそも文人サークルには秘密結社的な性格があるのではないかと、ということである。20 世紀初頭に前衛芸術運動がはじまったとき、それを支えていたのはイタリア各地における秘密結社的あつまりであった。そうした集団のいくつかにおいては異国趣味（エキゾチシズム）が盛んとなり、東洋の詩、日本の詩へ関心があつまった。特にナポリにおいては同時代の日本の短歌が紹介され、イタリアにおける日本研究の礎を形成した。彫刻家ラッファエーレ・ウッチェッラが主宰するグループに属していた下位春吉は与謝野晶子の紹介に努め、さらには晶子の歌に繰り返しメロディが付けられるというところまで著名にした。南部プーリア地方のサークルに属していた作曲家フランコ・カザーヴォラもまた日本の短歌の仏訳を歌曲化する試みを行い、*Tankas* とシリーズ化している。

また日本の短詩形がイタリア詩に与えたインパクトは計り知れず、初期のジュゼッペ・ウンガレッティ（第一詩集『埋もれた港 *Il porto sepolto*』は 1916 年に発表）もその影響下にあったといえる。その短さが前衛の枠組みにおいてとらえられ、ひいては「詩と詩でないもの *Poesia e non poesia*」についての論争に大きな示唆を与えた。「詩と詩でないもの」とは、今からちょうど一世紀前、ベネデット・クローチェがたてた命題・標語である。世紀末詩人ジョヴァンニ・パスコリの作品が念頭にあったわけだが、その短さをめぐって、短歌さらには俳句との近似性によって擁護されるということが 1930-40 年代にあった。

前衛文学サークルには秘密結社的な性格があること、そこでの関心は「詩と詩でないもの」という文学のカノンの根幹にふれる種類の芸術に向けられること、これらを要点として本発表は成り立っている。そこでは当然のことながら、発表者は政治的要素を捨象してしまっている。まさにここにおいてチェゼラーニ論文とは性格を異にしており、限界を定めてしまっている。結局は、秘密結社性なるものの定義こそが問題となるであろう。